

其頃小田原に武與左衛門須衛木齋藤など、いひて碁よく打者共あり、ばか山田にたがひせん
の碁、いづれも眞野には三つ四つの碁なり、これらの人、やれ下田のいくぢなしのばか山田の舟
かた村へ來り居ると云ぞ、急ぎつれてこよ、來まじきと云とも頭をもたげさすな、首に繩を付て
引て來よとて、つれよせ集て打けれども、終に碁には打負すと語れば、人聞て、孔子のたまはく、狂
にして直ならず、侗にして愿ならず、慳々として信ならず、吾是を知らずと云々、此の三つは悪く
とも又とりえ有所あらば、せめての事なり、若さもなくば、何のやうにもた、ぬ捨者、孔子も如何
共すべきやうなしと云々、此の山田は、碁を打一道のとりえあり、笑ふべからずといへり、彼の馬
鹿山田、今江戸へ來り、石町の六郎右衛門が處に有て入道し、仙榮と名付たり、今の上手には二ツ
の碁なり、此の者碁すきにて、あひてをきはす、夜る晝るわかで打けり、或時仙榮碁打所へ、兄の
六郎左衛門、病死唯今成べし、急來れとつぐる、仙榮聞て、此の碁打はたさずして、兄の死ぬにいか
でははんやといふ間に、死たりとわらへば、人聞て、物にすぎ、勝負をあらそふには、賢愚によらず、
むかしもさる事あり、略○中 仙榮も後は如何なる者になり、如何様なる金言をいひのこさんも玄
らずといふ、或時仙榮鼻紙を十帖、慈悲なる人より得たりとて、持てあるき人に見せ、鼻紙かけに
碁を打べしといふ、我も人も是がをかしさによび入、人集て四ツ五ツせいもくおき、鼻紙かけに
うたんとて、手を見石をつきよせ、集て助言をいひ、ともかくもして打勝てば、か仙榮をわらはん
とせしかども、碁にはかしくして却て紙をとられ、こなたがばかに成し事の無念さよといへ
ば、仙榮聞て、いや方々は勝べきと思ふ故にまくる、我はまけじと用心する故に勝、各々の寶をた
くはへ給ふも、得失の心得は、わが碁打に定て同じ事成べし、得をばおこる事なくして、わざはひ
の來らん事をつ、しむ、失をよくつ、しめば、必得來るべしといふ、げいは道によて賢とかや、

〔油井根元記〕三 丸橋忠彌與村八郎右衛門口論の事